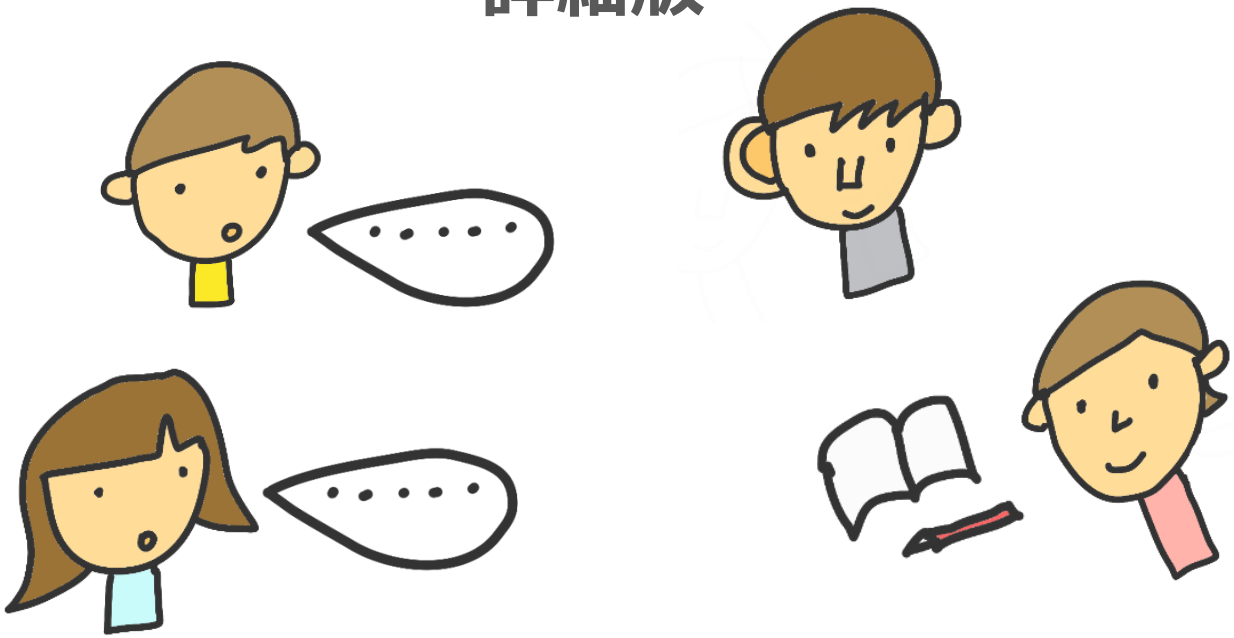
不登校の低年齢化に関する実態調査

定性調査

詳細版



INDEX

01 定性調査について

02 調査結果～子供編～

03 調査結果～大人編～

定性調査について

子供ヒアリング

学校の様子を聞くことで子供の心を傷つけることがないよう、子供のアドボカシーの専門家に監修を受け、ヒアリングを設計。また、低学年で思いを言語化しにくい面を補うため、絵カードを作成し、遊びの要素を取り入れ、不登校支援の専門家であるファシリテーターが子供の声を引き出した。

1．ヒアリング人数

204人

（フリースクール、学びの多様化学校、教育支援センター等を利用している小学校1年生～6年生）

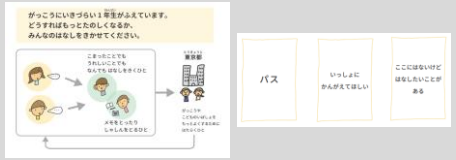
2．実践手法

・体　制：子供3名程度に対し、ファシリテーターと補助者の2名を基本配置。子供の状況に応じて個別に対応

・形　式：対面で実施。低学年が回答しやすいよう、絵カードを使用

NPO法人全国子どもアドボカシー協議会による監修

本調査を始めるに当たり、学校での様子等を聞くことで子供の心を傷つけることがないよう、子供アドボカシーの専門家として「NPO法人全国子どもアドボカシー協議会」の方々に、質問内容とヒアリング方法の監修を依頼。内容のほか、子供たちとの関係性作りが重要な冒頭の部分について、きめ細やかにアドバイスを頂いた。



ファシリテーター：
認定特定非営利活動法人カタリバ
絵カード作成：NPO法人ぷるすあるは

大人ヒアリング

不登校支援の現場に関わる支援者に対し、半構造化インタビュー※を実施。分析に当たり、同席した補助者が文字起こし後、箇条書きにまとめ、ヒアリングの内容をコーディング・カテゴリー分けを行った。

※事前に準備した質問を基にしつつ、相手の回答に応じてより詳しく内容を掘り下げるインタビュー形式のこと。

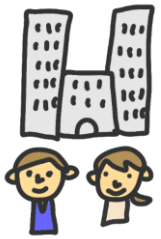
1．ヒアリング人数

40団体　（教育相談員、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、フリースクール等従事者、学びの多様化学校の職員等）

2．実践手法

・体　制：ファシリテーターと補助者の2名を基本配置

・形　式：ヒアリング対象者に事前質問フォームへの回答を依頼し、当日はファシリテーターが事前回答を掘り下げる形で実施



INDEX

01 定性調査について

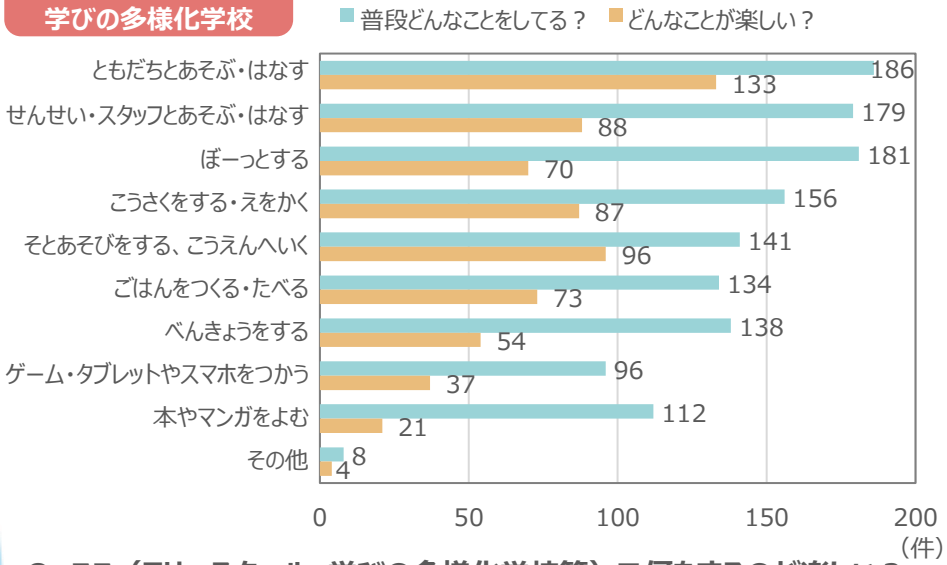
02 調査結果～子供編～

03 調査結果～大人編～

子供 Q.ここ（フリースクール、学びの多様化学校等）で何をしている？何をするのが楽しい？ Q.幼稚園や保育園ではどんなふうに過ごしていた？何をするのが楽しかった？

※複数回答可

フリースクール・教育支援センター・学びの多様化学校



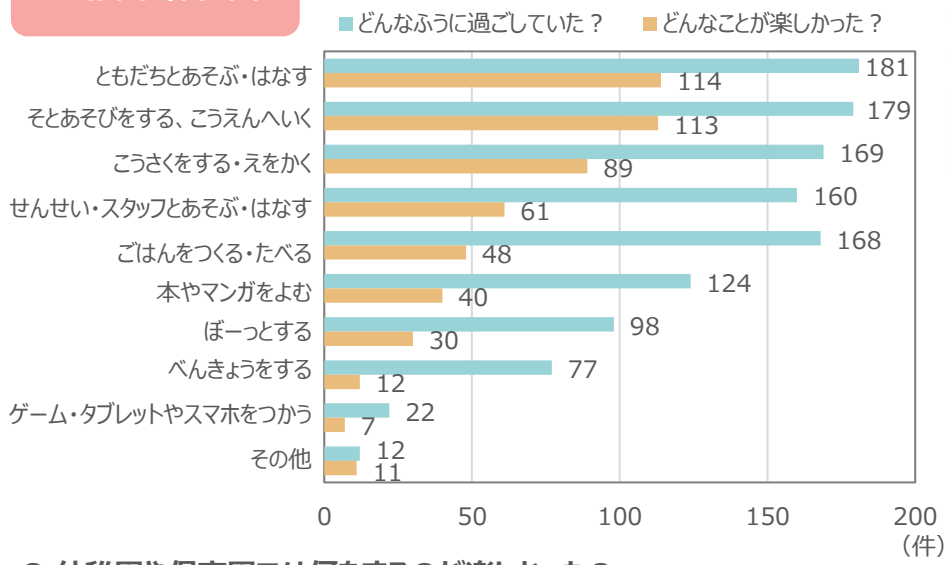
Q. ここ（フリースクール、学びの多様化学校等）で何をするのが楽しい？

ともだちとあそぶ・はなす
- 友達と遊んで話すのが好き。(小3　ほか)
- 楽しいことありすぎる。友だちとカードゲームしたり、工作したり、押し入れに寝床があって寝たりする。押し入れは人気すぎてぎゅうぎゅうだよ。（小2）

せんせい・スタッフとあそぶ、はなす
- 一緒に遊ぶことが好き。（小3）
- 先生以外に、サポーターの人とかとも話す。（小6）

ぼーっとする
- 畳の部屋でごろごろする。（小3　ほか）
- 時々ぼーっとする。（小5　ほか）

幼稚園・保育園



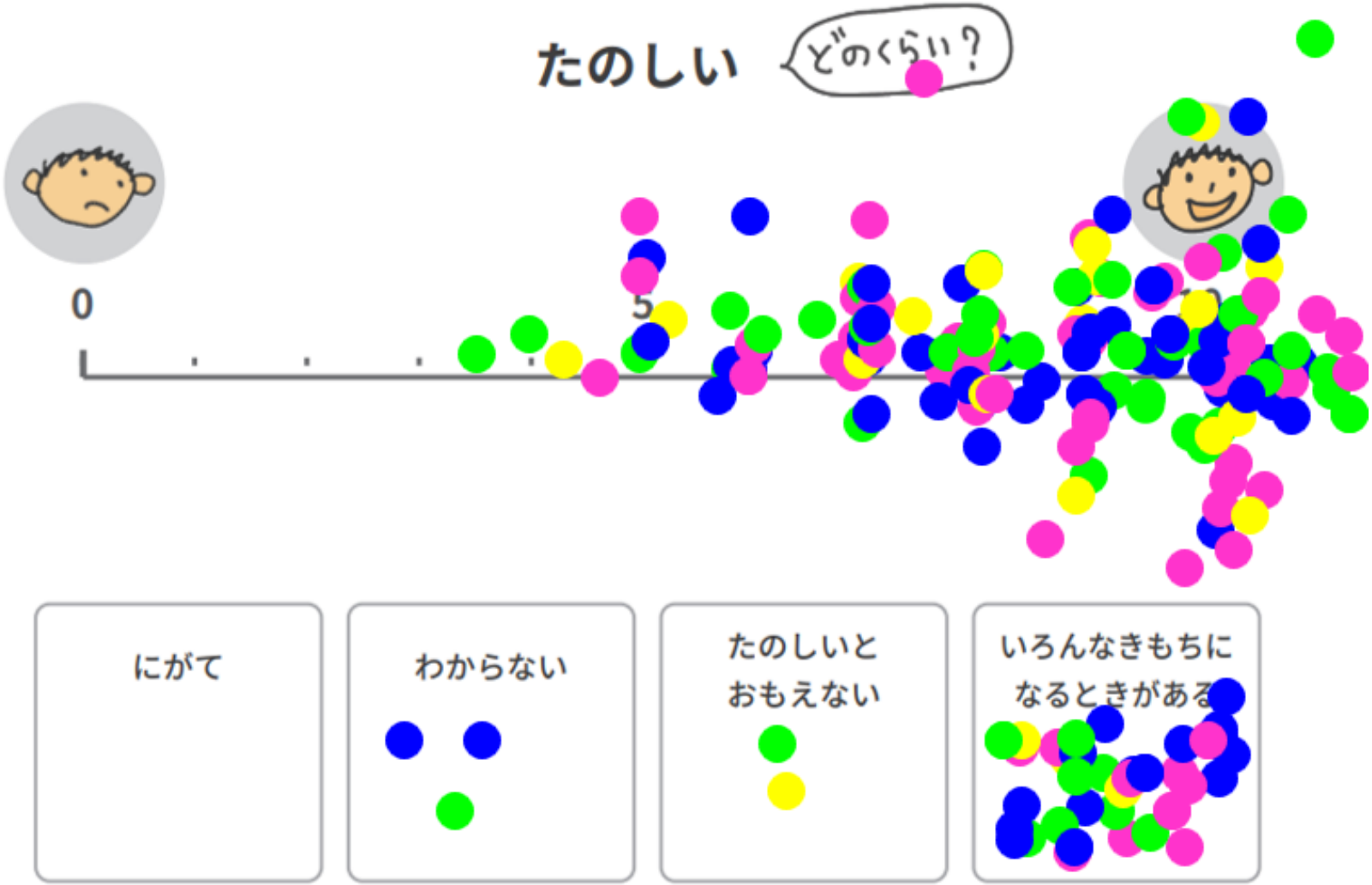
Q.幼稚園や保育園では何をするのが楽しかった？

ともだちとあそぶ・はなす
- 友達と遊ぶことが楽しかった。（小2）

そとあそびをする・こうえんへいく
- （自主保育に通っていて）ずっと外にいた。(小2)
- プールもした。（小3）
- 公園に先生と友達で行って、ブランコや鬼ごっこをした。保育園の遊具で遊んだりした。（小6）

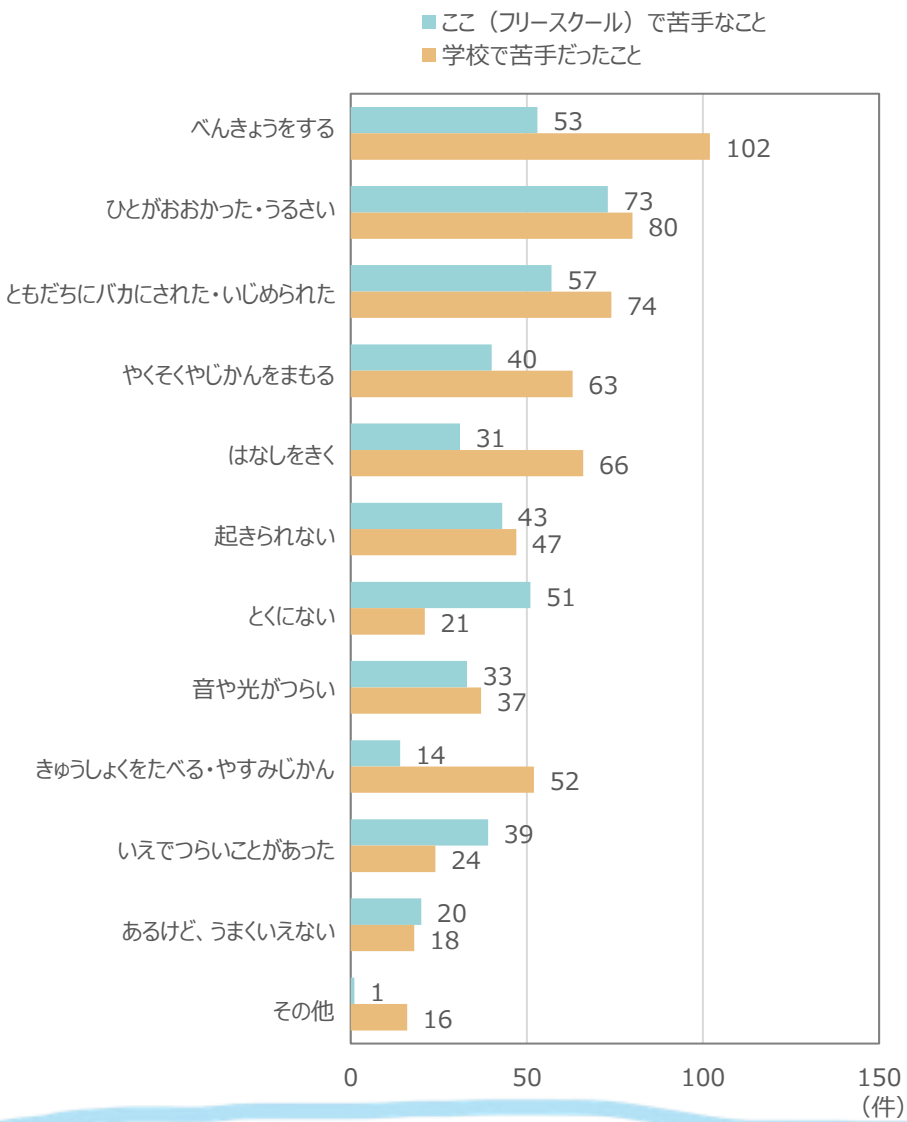
こうさくをする・えをかく
- 塗り絵をよくしていて、好きなものを書いていた。（小2）
- たくさん作っていた。この季節だと短冊を作った思い出がある。(小4)

子供 Q.ここ（フリースクール、学びの多様化学校等）は楽しい？どのくらい？



子供 Q. ここ（フリースクール、学びの多様化学校等）で苦手なことはある？ Q. 学校で苦手だったことはある？

※複数回答可



Q6. 学校でにがてだったことはある？

べんきょうをする
- 勉強が面倒くさかった。（小2）
- テストが嫌だった。（小2）
- 勉強が分からないんじゃなくて勉強が嫌い。音楽は嫌い。英語は好き。（小3）
- 自分で勉強することはいいけど授業が嫌。（小6）

ひとがおおかった・うるさい
- 以前いたクラスはうるさかった。（小2）

ともだちにバカにされた・いじめられた
- 自分はされてないけど苦手。(小2)
- 1年生の時(に友だちにバカにされた・いじめられた)。（小3）
- 友だちも先生も学校自体が嫌だった。（小3）

やくそくやじかんをまもる
- ルールとか起立とか着席とか色々細かいところまで言われて、どっち行けばいいのか分かんないし、ほにゃほにゃ喋られて頭痛くなった。（小3）
- 時間割が多くて嫌だった。（小4）

はなしをきく
- めんどくさい。(小2)
- （はなしを聞くのは）嫌と言うより、だるかった。1年生の時、代わりの先生が、かぎかっこの話しててめんどくさくて（実際は短いのに）1時間のように感じた。（小4）

その他
- 1年生の先生は良い先生だったけど、変わっちゃった。（小4）
- 担任ではなく、図工とか音楽の先生と合わなかった。（小6）

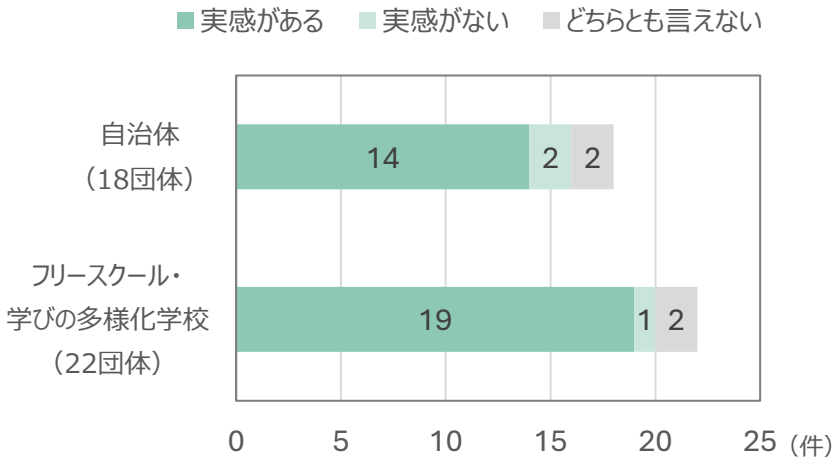
INDEX

01 定性調査について

02 調査結果～子供編～

03 調査結果～大人編～

大人 Q. 小学校1年生や低学年の子供の不登校が増えている実感はありますか？また、それはいつ頃から実感し始めましたか？



＜実感がある＞
- コロナあたりから増えていると感じている。（フリースクール）
- 数年前に比べて、顕著ではないが、じわじわと増えている。（相談員）
- 10年程前から低学年の子供が来ており、親の会にも小学生の保護者が増えて低年齢化を感じていた。（学びの多様化学校）
- 入学を控えた年長の保護者から見学申込が来る。（フリースクール）

＜実感がない＞
- 低学年の不登校はいるが、増加の実感はない。（相談員）
- 今年度の新入生は比較的落ち着いており、むしろ減少した印象。（相談員）

＜どちらとも言えない＞
- 2年前くらいは実感があったが、最近はない。（フリースクール）

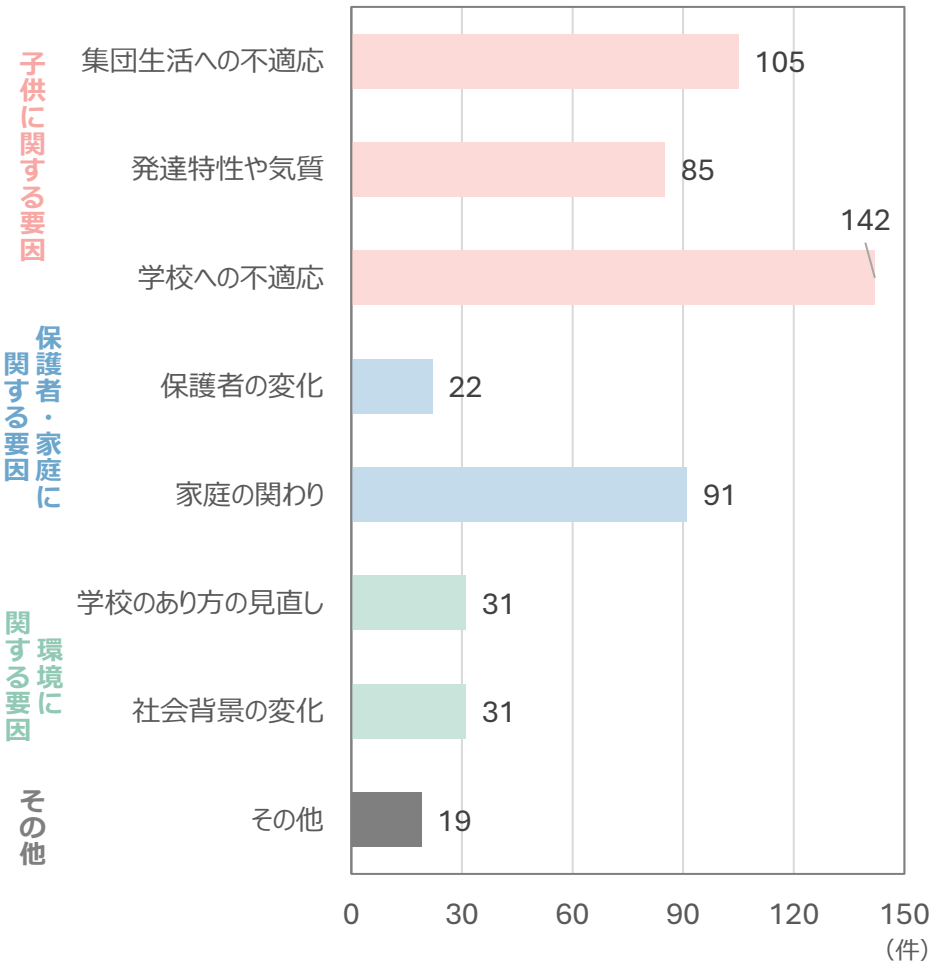
コロナ禍が子供たちに与えた影響と社会変化

今回の調査で、コロナ禍が子供たちに与えた影響について、多くの声が聞かれました。以前から存在していた不登校の背景・要因が、コロナ禍を機に加速し、意識の変化などはコロナ後も継続していると考えられます。

- 保護者及び社会全体の価値観の変化：
  感染リスクや生活変化を契機に、**保護者が「無理に登校させない」選択を取りやすく**なった。国やメディアの発信も後押しし、不登校が否定的に捉えられにくくなった、との声もあった。
- 幼児期の経験機会の不足：
  コロナ禍での登園制限や活動縮小により、同年代との自然なやり取りや発達段階で必要な経験が不足。結果、社会性・協調性の発達機会が減少し、学校生活への適応力が低下したとの見方がある。
- 家庭環境や保護者の働き方の変化：
  リモートワークなどの普及により、子供の家での過ごし方が変わったことや、スマホや動画を個別に楽しむ等、**自分の好きなことを個別にやることが習慣化した**影響を挙げる声も複数挙がった。

大人 Q.小学校1年生や低学年は、どんな要因で不登校になっていますか？

※複数回答可



子供に関する要因

＜集団生活への不適応＞

- 集団生活の難しさとしては、時間の縛り・ルール・人数の多さに慣れていないこと等がある。（相談員）
- じっと座っていられないことで叱られる、時間で行動を区切られたりすることに窮屈さを感じたりということが要因となっていると聞く。（フリースクール）

＜発達特性や気質＞

- 発達障がい（主にADHD、ASD〈自閉スペクトラム症〉、学習障害など）が要因で不登校になるケースがある。（フリースクール）

＜学校への不適応＞

- 長時間座ることやじっとしていることが苦痛な子もいる。（フリースクール）
- フリースクールに移って個別対応や選択的活動があり、以前の学校より負担が軽くなり通えるようになった例がある。（学びの多様化学校）
- 「小1ギャップ」が大きく、保育所や幼稚園で自由に遊んでいた子が、小学校での「座りなさい」「返事をしなさい」といった指示に適応できず、困難を感じる。（相談員）
- 保育園では自分の好きなことを選んで遊ぶ環境が増えており、小学校の決められたカリキュラムとのギャップが大きい。（フリースクール）

保護者・家庭に関する要因

＜家庭の関わり＞

- 保護者、特に母親が不安を感じやすいと、子供もそれを察知して登校をためらう場合がある。言葉で表現できなくても保護者の空気を感じ取っていると思われる。（相談員）
- 兄弟が不登校の場合、本人も不登校になるケースが多い（相談員）

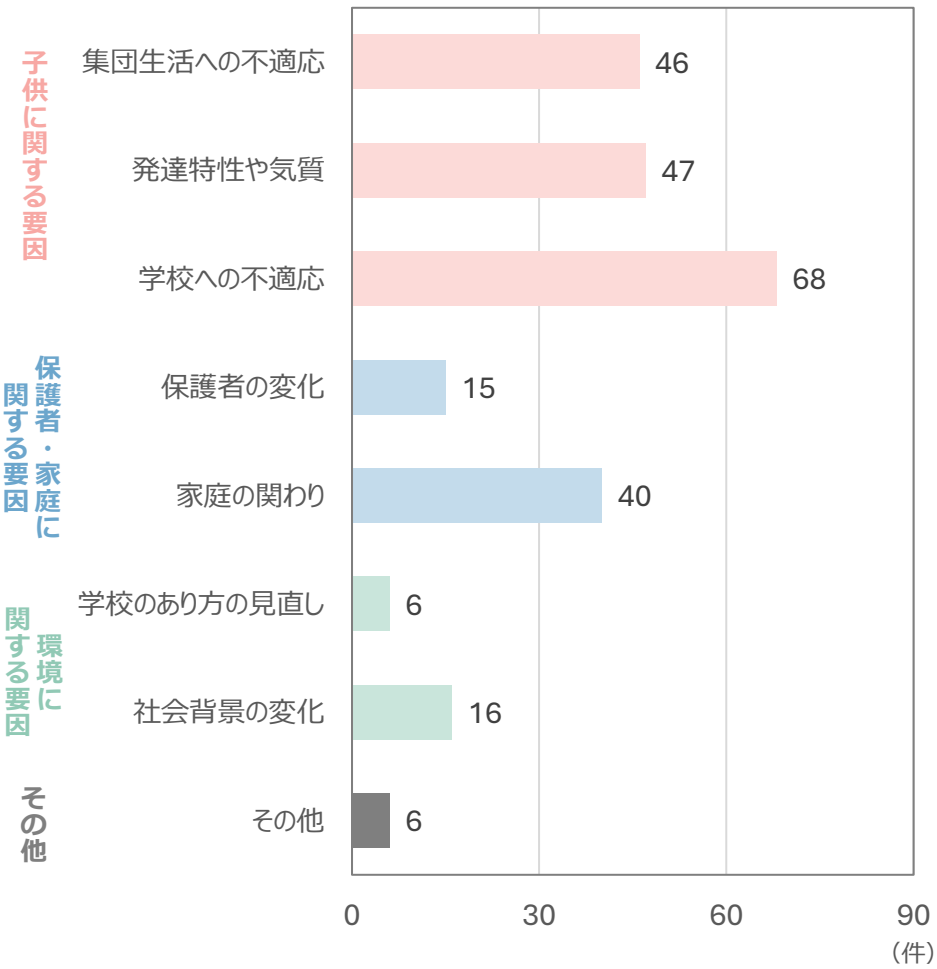
環境に関する要因

＜社会背景の変化＞

- 今の低学年は、コロナ禍に1、2歳だったので、外出等の経験不足等の影響も感じる。（相談員）

大人 Q.他の学年の不登校要因との違いがあれば、教えてください。

※複数回答可



子供に関する要因

＜集団生活への不適応＞

- 小学校1年生の1学期で集団生活が難しいと感じ、「合わない」と表出する子供が増えている印象がある。（相談員）
- 「大人数の集団が苦手」で、実際に「集団が嫌だった」と話す子供も多い。（フリースクール）

＜発達特性や気質＞

- 騒がしい環境が苦手という子供が多い。中には「自分自身も騒がしいのに、騒がしさが苦手」という子供もいる。（学びの多様化学校）
- あえて言えば、低学年では発達障がい（ASD・ADHD等）の診断が主訴に含まれる割合が高い。（フリースクール）

＜学校への不適応＞

- 学習内容がわからない、勉強についていけない、友人関係に悩んでいるという話を聞く。（フリースクール）
- 幼稚園・保育所からの環境の違いにより、急な集団環境への変化に適応できない。（相談員）

保護者・家庭に関する要因

＜家庭の関わり＞

- 高学年以降は本人の意思も強いが、低学年では家庭から受ける影響が大きい。（相談員）

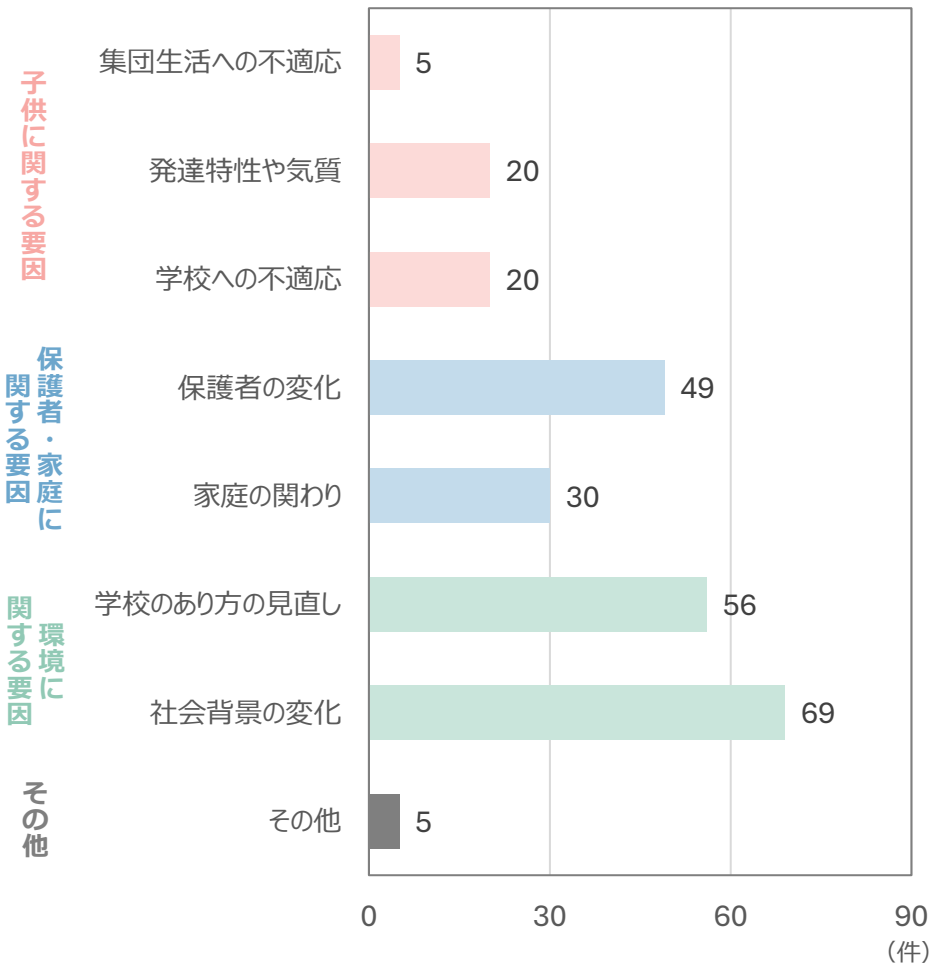
環境に関する要因

＜社会背景の変化＞

- コロナ禍の影響で、幼稚園・保育所等で集団での活動が制限されたことで、不登校の要因につながった可能性も感じている。（相談員）

大人 Q.ここ5年間くらい（コロナ禍を経て）で不登校の低年齢化が進んでいる要因は何だと思われますか？

※複数回答可



子供に関する要因

＜学校への不適応＞

- 一般に言われる小１ギャップ（集団になじめない等、特別に配慮が必要な児童）が増加している。（相談員）
- 最近の1年生は、「机に座っていられない」「立って上履きを履けず座ってしまう」等、基本的な生活動作が難しい子供が増えていると感じる。（相談員）

保護者・家庭に関する要因

＜保護者の変化＞

- テレワークの普及で、「無理に行かせなくてもよい」と考える保護者もいるなど、複数の要素が重なって不登校につながっていると感じる。（相談員）
- 「学校に行かなくてもいい」と、不登校を容認する考え方の広がりにより、早い段階で不登校を受け入れる保護者が増えてきた。（フリースクール）

環境に関する要因

＜学校のあり方の見直し＞

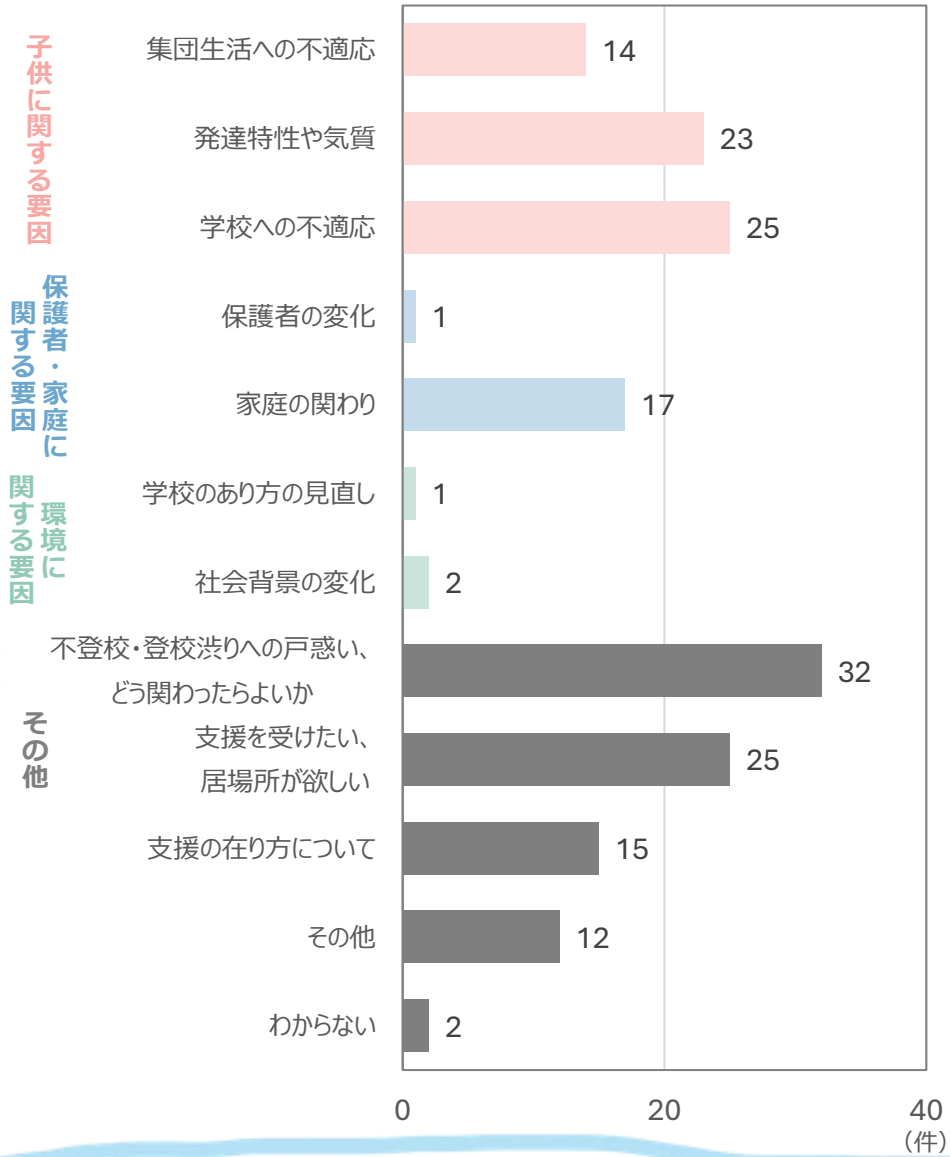
- 不登校の報道が増え、学校以外の選択肢を柔軟に受け入れる保護者は増えていると感じる。（フリースクール）

＜社会背景の変化＞

- コロナ禍で集団行動が制限され、会話や人との距離等を学ぶ必要な時期に経験できなかった。（フリースクール）
- 不登校になる子供はゲーム、スマホ等との付き合い方が下手なケースが多く、ゲームばかりで夜眠れない等が不登校に繋がっている。（フリースクール）
- 社会全体の教育観が変化した結果、画一的な指導が合わない子供が増えている。（学びの多様化学校）
- 「学校に行かなくてもいい理由がある」という認識が広まり、不登校への見方が和らいだ。（フリースクール）

大人 Q.小学校1年生や低学年、または保護者からどういった相談が多いですか？

※複数回答可



子供に関する要因

＜集団生活への不適応＞
- ケースによっては、子供が「なんか怖い」「通学路が怖い」といった漠然とした不安等の心理的な症状を訴えることがある。（相談員）

＜発達特性や気質＞
- 学習への取り組ませ方、癇癪、登校渋り、発達特性の課題（集中力がない、落ち着きがない、指示が入らない、離席等）。（相談員）
- 読み書きの困難を抱える子供が増えており、学校や勉強を嫌がる原因となっている。（相談員）

＜学校への不適応＞
- 低学年の相談では、生活困窮や保護者との対立的関係、登校渋り、学力不振、教師対応への不安が目立つ。（相談員）

保護者・家庭に関する要因

＜家庭の関わり＞
- 母親との分離不安も小1、小2特有の相談として見受けられる。（相談員）

その他

＜不登校・登校渋りへの戸惑い、どう関わったらよいか＞
- 「どう子供を支援してよいか分からない」という声がある。（相談員）
- 学校とうまくいっていない（関係性を築けていない）、学校に話すと過剰な要求になるのではないか、という相談も多い。（相談員）

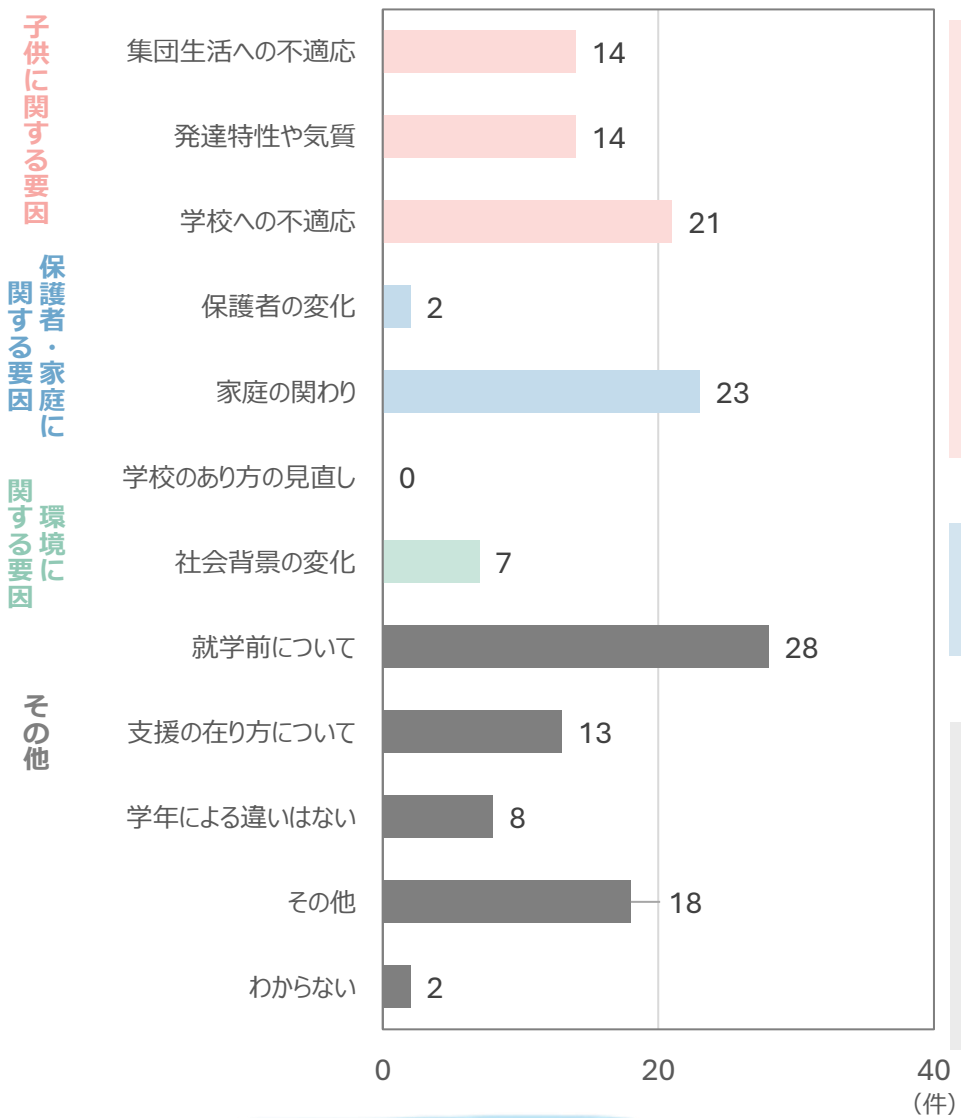
＜支援を受けたい、居場所が欲しい＞
- 学校に通えないことへの不安から、子供を公的な場に置きたいという相談が多い。（相談員）

＜支援の在り方＞
- プレイセラピーを通じて、「漠然とした不安や恐怖」が根底にあることが多いと感じている。（相談員）

＜その他＞
- 低学年の子供は自分の気持ちを言葉にすることが難しく、保護者が「理由がわからない」「言ってくれない」という相談が多い。（相談員）

大人 Q.小学校1年生や低学年に特有の相談はありますか？また就学前からの相談はありますか？

※複数回答可



子供に関する要因

＜集団生活への不適応＞

- 小学校という集団生活への不適応は、特に低学年や就学前から小学校1年生にかけて多い。(相談員)

＜発達特性や気質＞

- 低学年では、座っていられなかったり、集団が苦手で癇癪を起こし教室から飛び出してしまうことがある。(相談員)

＜学校への不適応＞

- 構造化された時間や決まったスケジュールに適応する中で、「小学校1年生ギャップ」のような現象が見られる。(相談員)
- 保育所・幼稚園と小学校では環境のギャップが大きく、学校が嫌になる子も多い。(相談員)

保護者・家庭に関する要因

＜家庭の関わり＞

- 母子分離不安からくる行き渋りや、不登校につながるケースは低学年特有だと感じる。(相談員)

その他

＜就学前について＞

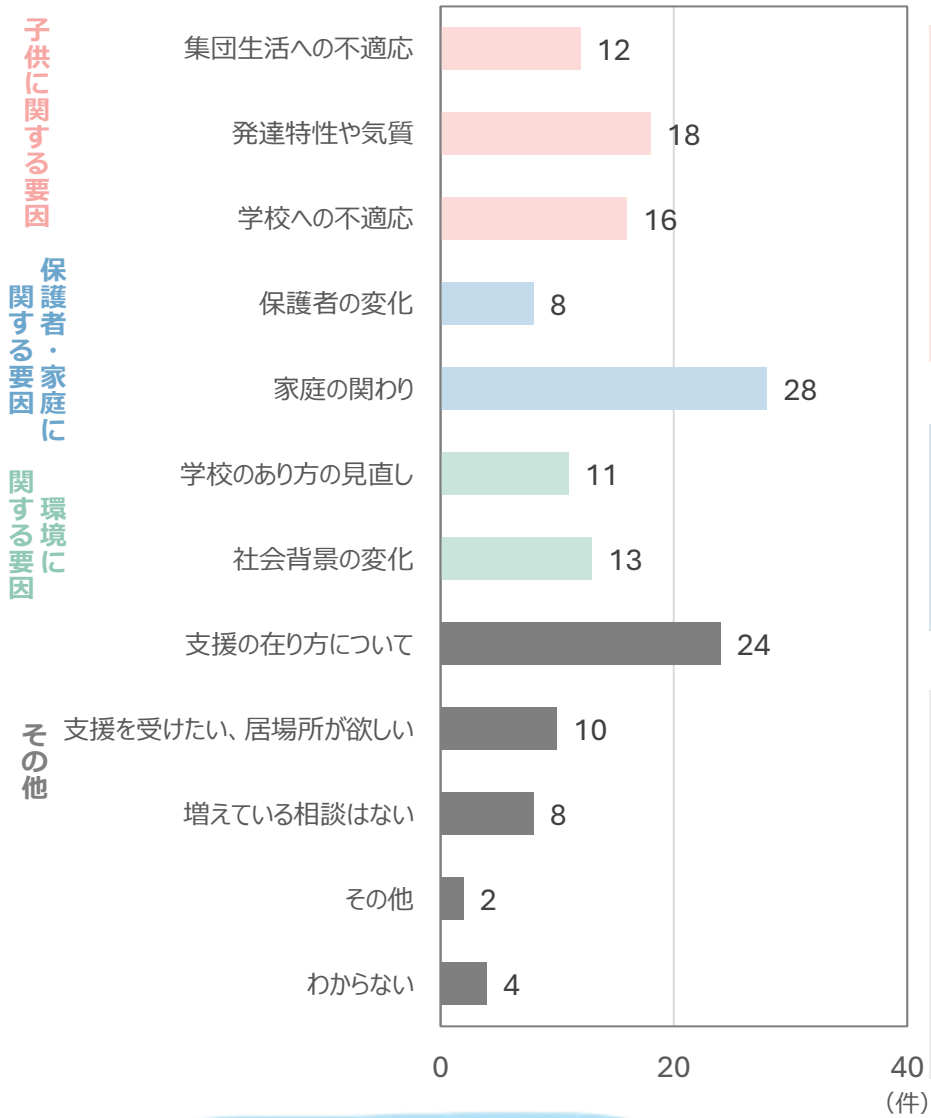
- 就学前の相談件数は多くない。その年齢では、保健相談所や子供発達支援センター等が発達支援の主な窓口となる。（相談員）
- 就学前検診での専門医からの指摘後に、家庭でのフォローが不十分な家庭もあり、それが不登校に繋がることがある。（相談員）

＜支援の在り方について＞

- 相談の多くは学校を経由し、「何らかの支援が必要」と判断された状態で寄せられる。(相談員)

大人 Q.ここ5年間くらい（コロナ禍を経て）で増えてきている相談はありますか？

※複数回答可



子供に関する要因

＜集団生活への不適応＞
- 集団生活に馴染めないという相談が一番多い。（相談員）

＜発達特性や気質＞
- 発達に関する相談が増加していると感じる。子育て中の困りごとから「もしかして発達に課題があるのでは」といった相談もある。（相談員）

＜学校への不適応＞
- 小学校入学時に「小1ギャップ」のような状態となり、急な集団環境への適応が難しくなっているケースがみられる。（相談員）

保護者・家庭に関する要因

＜家庭の関わり＞
- 保護者が忙しく、スマートフォンやゲームに依存する生活になりやすい。（相談員）
- 養育困難家庭の相談は増えている。不登校に加え、物価高やひとり親の増加などで家庭環境が不安定な家庭が増加している。（相談員）

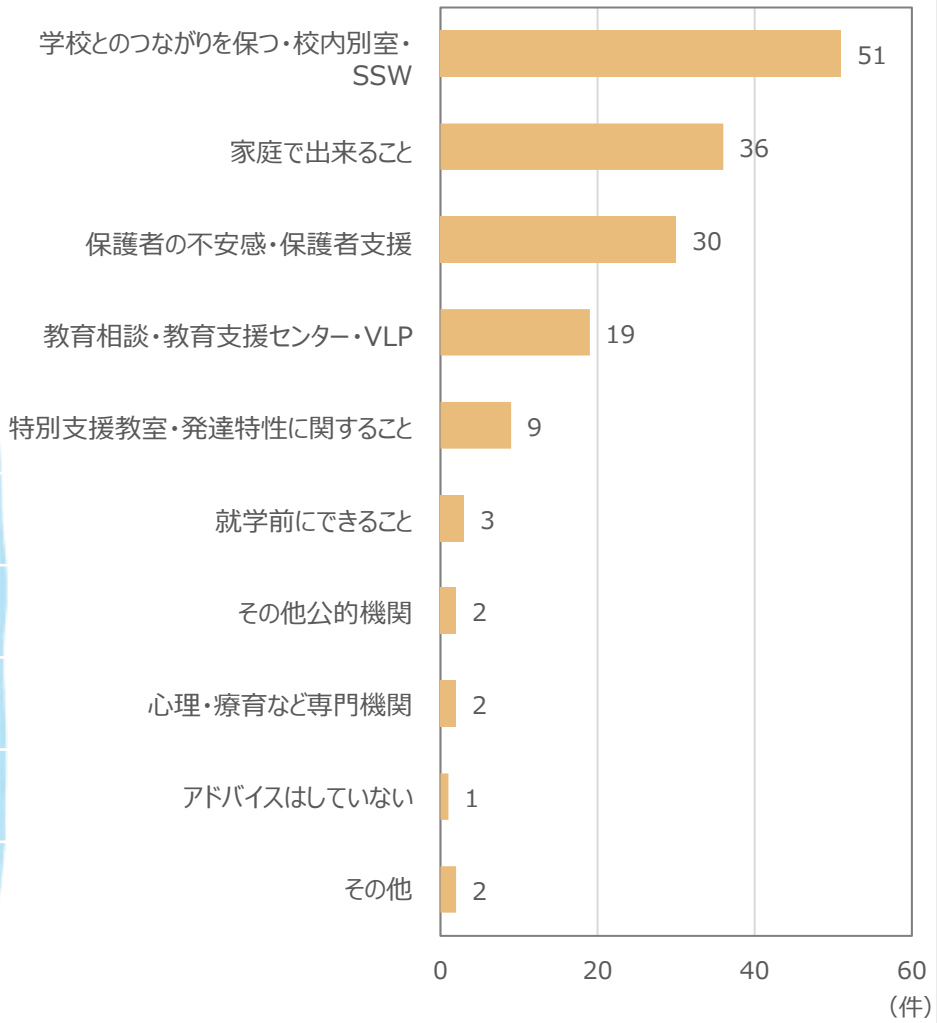
その他

＜支援の在り方について＞
- 保護者自身が相談や外出をできない状況が長期化する家庭も多い。自ら相談に行けない家庭には、訪問によって本音を引き出す支援が行われている。（相談員）
- 低学年からの相談が増えている。人間関係、保護者、教員、友人、学業、生活リズム、起立性障害等、具体的な背景を把握したうえで相談に来る方もいる。（相談員）

＜支援を受けたい、居場所が欲しい＞
- 学校外で利用できる施設の情報や、学校外での学習の適切な評価方法に関する利用希望もある。（相談員）

大人 Q.小学校1年生や低学年（または就学前）の保護者にどんなアドバイスをしていますか？特に有効だったアドバイスはありますか？

※複数回答可



＜学校とのつながりを保つ・校内別室・SSW＞

- 保護者の意向を尊重しつつ、学校や支援とのつながりを切らさないよう、丁寧に話をする。（相談員）
- 学校＝教室だけではないという視点で、教室以外の保健室、相談室、応接室など子供が過ごしやすい場所を探してみてはと話す。（相談員）

＜家庭で出来ること＞

- 生活リズムを整えることが子供にとって基本であると伝える。（相談員）
- 子供のできることを捉え、スモールステップで目標を設定し、長い目で見守る。（相談員）

＜保護者の不安感・保護者支援＞

- 保護者の不安が強いと子供にも伝わりやすく、特に低学年で顕著。（相談員）
- 家庭が不登校に引っ張られて暗くならず、明るい雰囲気を保つよう伝える。（相談員）

＜教育相談・教育支援センター・VLP＞

- 適応指導教室、別室登校、フリースクール、VLP等、様々な選択肢があり、保護者と子供と話し合って次のステップを決める。（相談員）

＜特別支援教室・発達特性に関すること＞

- 発達面に課題がある場合は、特別支援教室の活用を提案し、学校や医師等のアプローチを通して支援を開始することもある。（相談員）

＜就学前にできること＞

- 就学前の保護者には、事前に学校公開や運動会等の見学、通学路を散歩する等、学校へのポジティブな気持ちを育てるようにアドバイスする。（相談員）

＜その他公的機関＞

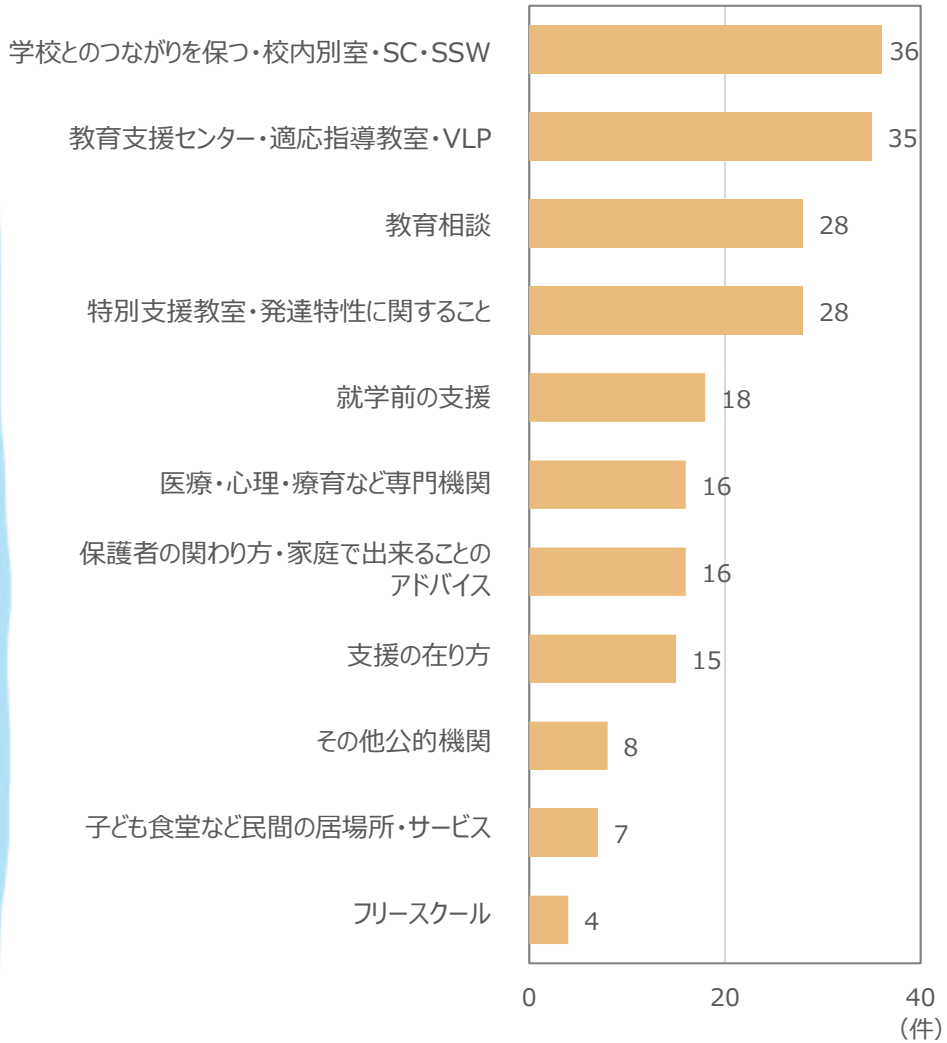
- 小学校1、2年生の場合は、入学後に不適応が出るケースが多いため、教育相談や、連携している児童館・図書館を案内する。（相談員）

＜心理・療育など専門機関＞

- 教育相談所や医療等の専門機関への相談を助言する。（相談員）

大人 Q.小学校1年生や低学年の保護者に紹介している支援は何ですか？また就学前に紹介している支援はありますか？

※複数回答可



＜学校とのつながりを保つ・校内別室・SC・SSW＞

- 保護者には「まず学校に相談されましたか？」と確認し、必要に応じて学校にも連絡を入れている。（相談員）

＜教育支援センター・適応指導教室・VLP＞

- 児童・生徒の状況に応じて、就学相談、児童発達支援センター、子供家庭支援センター、適応指導教室等を紹介している。（相談員）
- 教育支援センターでの活動内容は、個別学習・小集団での運動・自由時間等。調理実習や理科の授業も行っている。（相談員）

＜教育相談＞

- 感情コントロールや癇癪の相談には、教育相談でのプレイセラピーやペアレントトレーニングを勧める。（相談員）
- 1年生の保護者は、子供が学校に馴染めないと大きなショックを受けるため、新しい場所を紹介することはハードルが高い。まずは悩みを聞いてもらえる場所につなげることが大切だと考えている。（相談員）

＜特別支援教室・発達特性に関すること＞

- 発達障害や学習障害が疑われる場合は、特別支援教育課や認知特性に関する相談機関を紹介している。（相談員）

＜就学前の支援＞

- 就学前は、保育所や幼稚園から就学相談につなげてもらい、発達の療育など、養育相談をしながら支援を受けることがある。（相談員）

＜医療・心理・療育など専門機関＞

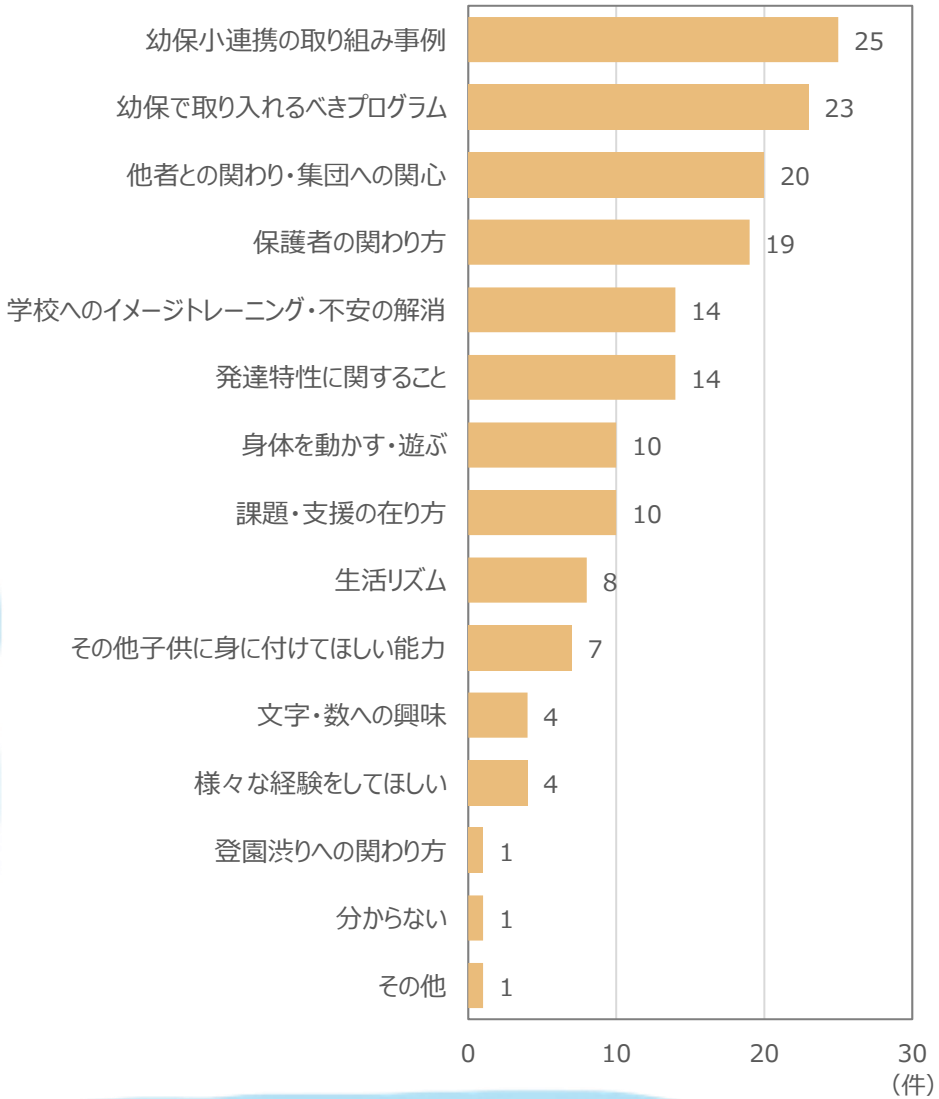
- 本人の発達特性による場合は、ソーシャルスキルトレーニング（SST）や療育を勧める場合もある。（相談員）

＜保護者の関わり方・家庭で出来ることのアドバイス＞

- 発達が強く疑われる場合でも、いきなり「発達障害」と伝えるのではなく、他の困りごとのエピソードを探っていく中で助言を考える。（相談員）

大人 Q.就学前の段階から、幼稚園・保育所や家庭で取り組んでおくとよいことはありますか？

※複数回答可



＜幼保小連携の取り組み事例＞

- 小学校までに身に着けておきたい生活習慣や学校制度の説明を記している冊子を配布しており、幼稚園・保育所からのニーズが高い。（相談員）
- 校長が保育所の保護者会へ参加、小学校の運動会や学芸会に未就学児を招待する等、「小学校は怖くない、大丈夫」と子供や保護者に実感してもらうことを大切にしている。（相談員）

＜幼保で取り入れるべきプログラム＞

- 保育所や幼稚園でソーシャル・エモーショナル・ラーニング（SEL）などのプログラムをもっと活用すべき。他者との関わりや自己表現を育てる効果が期待される。（相談員）
- 保育所や幼稚園では、遊びを通じた他者とのかかわり（喧嘩や仲直り等）の経験が大切。（相談員）
- 幼保は家庭支援につなげやすい場であり、幼保の段階で、保護者に「困ったら相談してよい」という意識づけを行うことが大切。（相談員）

＜他者との関わり・集団への関心＞

- 対人関係スキルとして、「相手の嫌なことを言わない」「自分がされて嫌なことはしない」といった基本的な関わり方が重要。（相談員）

＜保護者の関わり方＞

- 何より家庭で子供を認めてあげてほしい。「これができない」ではなく「これができるようになったね」と肯定的に接することが重要。（相談員）
- 普段は問題のないようにと過保護になりすぎ、いざ問題が起きた時に子供が自力で対処できないという状況も見られる。（相談員）

＜学校へのイメージトレーニング・不安の解消＞

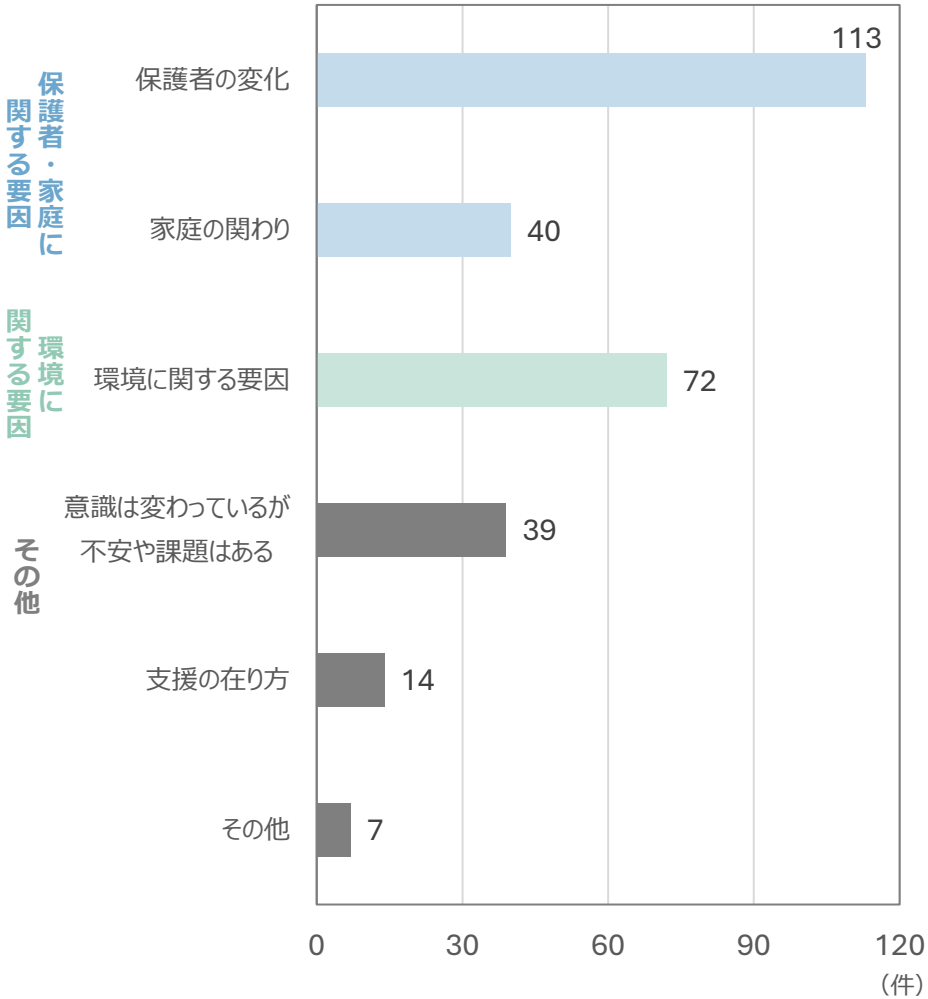
- 幼稚園・保育所・家庭でも「学校は楽しいところ」というポジティブなイメージづくりが求められている。（相談員）
- 幼稚園・保育所の先生が多くの情報をもっているので、不安な保護者は就学前から園に相談したり、相談室に繋がってもらえればと思う。（相談員）

＜発達特性に関すること＞

- 早めの相談・医療対応で小学校入学時のギャップを減らせる。（相談員）

大人 Q.不登校に対する保護者の意識の変化を感じますか？

※複数回答可



保護者・家庭に関する要因

＜保護者の変化＞
- 「学校に行けないこと＝ダメなこと」という価値観が、「学校以外にも学びの場がある」という認識に変化している。（フリースクール）
- 以前は「登校を促す支援」が主流だったが、行けないことを前提にどう支えたらいいか、と考える保護者が多くなった。（相談員）

＜家庭の関わり＞
- 子供が親に対してフラットな関係になり、親子関係も以前と変わってきている。（フリースクール）
- 保護者がシングルだったり、コロナ後も就労できない、しない場合があり、家庭環境が厳しいケースが目立つ。（相談員）

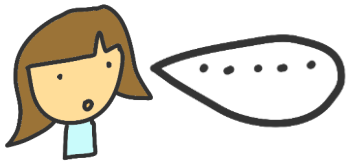
環境に関する要因

＜環境に関する要因＞
- チャレンジスクールやフリースクール等の選択肢が増えた。（相談員）

その他

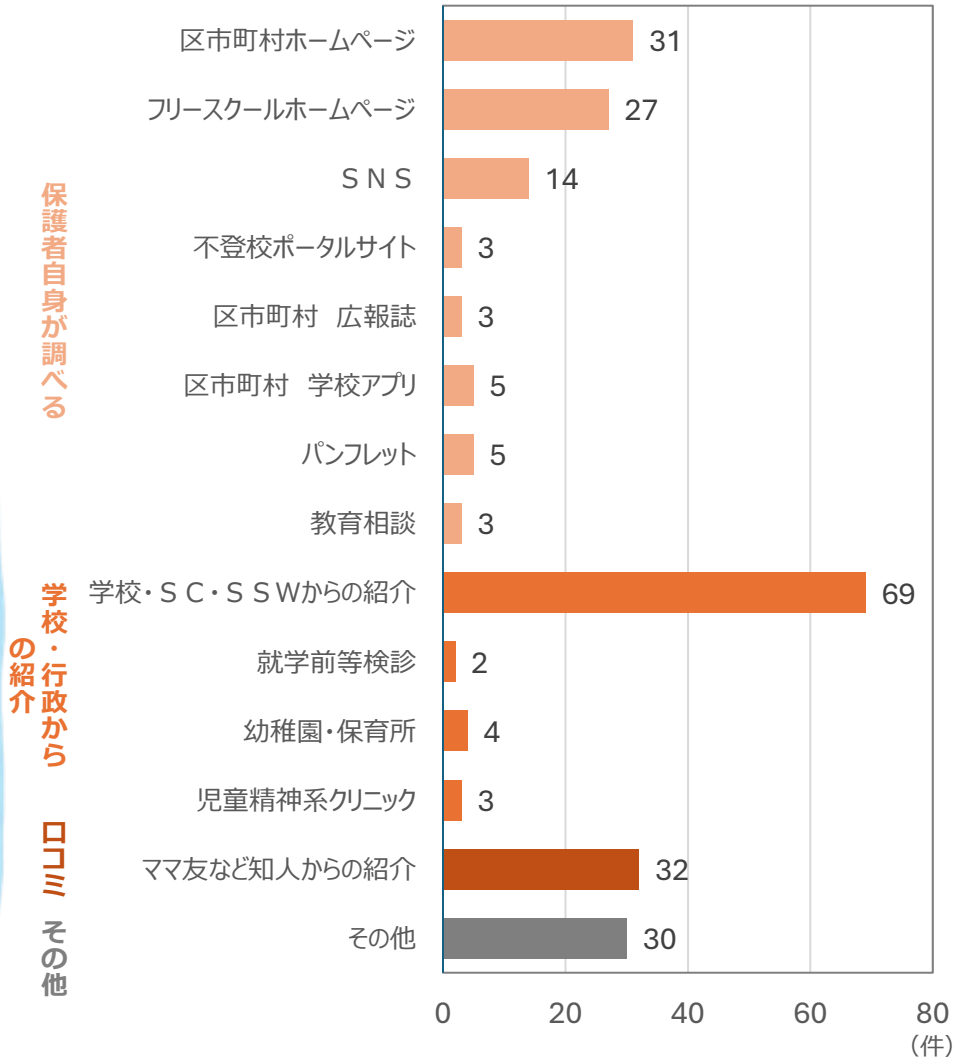
＜意識は変わっているが不安や課題はある＞
- 学校に行かなくてもいいけれど「どう過ごさせようか」という内容の相談が多い。（相談員）

＜支援の在り方＞
- 選択肢が増えたことで支援者の対応が難しくなり、子供たち自身も先が見通せず困っている。（相談員）



大人 Q.保護者は、この相談支援をどこで知ることが多いですか？

※複数回答可



●保護者自身が調べる

＜区市町村ホームページ＞

- ホームページやSNSで知って来られる保護者もいる。（相談員）
- 支援者が紹介するより、保護者自身がネット検索でフリースクールや居場所を探すケースが多い。（相談員）

＜フリースクールホームページ＞

- 公的な支援が合わず、インターネット検索や口コミで民間施設にたどり着く家庭が多い。（フリースクール）

＜SNS＞

- SNSやInstagram、他の組織・団体が紹介してくれた記事をきっかけに知るケースもある。（フリースクール）

●学校・行政からの紹介

＜学校・SC・SSWからの紹介＞

- インターネット以外では、スクールカウンセラー、保健室、スクールソーシャルワーカーを通じてつながるケースがある。（相談員）
- 学校や医療機関、療育先、小学校の先生からの紹介もある。（フリースクール）

●口コミ

＜ママ友など知人からの紹介＞

- 「ネットで見て」よりも「人を介して」の安心感が大きく、特に不登校初期は保護者自身が不安を抱えているため、「信頼できる誰かからの紹介」という形が背中を押すことが多い。（フリースクール）
- 保護者同士のつながりやママ友、兄弟関係等の紹介で相談につながるケースもあった。（相談員）

●その他

＜その他＞

- 特に大型連休明け、夏休み明け、冬休み明けなどは問合せが急増する。（フリースクール）

大人　その他の意見

＜保護者の意識の変化＞

- 登校させることが重要という価値観ではなく、子供の意思を尊重する価値観に変化してきている。（相談員）
- テレワークにより、子供が休んでも仕事に支障が出にくくなった。（相談員）
- 今の小1の保護者の方が、上の世代よりも「無理ならフリースクールや家庭でもよい」と考える傾向が強いという印象がある。（フリースクール）
- 心身の健康が最優先という価値観から、子供の思いを大事にしたいと考える保護者が増加している。（相談員）

＜現状の支援メニューの課題＞

- 教室に入れない児童のための校内の居場所づくりが難しい。人の配置や場所の確保の問題がある。（相談員）
- 発達的課題が関係して不登校になる児童も多い。（相談員）
- 小学校で校内別室や適応指導教室の整備が進めば、学校で過ごせる子供が増える可能性がある。（相談員）
- 低学年の子供の受け入れには、集団指導よりも子供の状況に応じた個別対応が必要。（相談員）

＜低学年の子供や保護者にあるとよい支援＞

- 不登校は誰にでもなる可能性がある。入学準備では不登校についてはほとんど情報がなく、幼児期のうちに保護者向けに情報があれば、子供の状況を落ち着いて理解し、ゆっくり考えられる。（学びの多様化学校）
- 理想は入学前に幼稚園や保育所と情報連携を図り、問題のある子供の情報を小学校に共有すること。それにより学校側も早期に対策が取りやすくなる。（相談員）

＜低学年に特有の相談や要望＞

- 「学校に行けないこと」への強い不安と葛藤、特に1年生の不登校に対して「早すぎる不登校」という強い不安やショックがある。（フリースクール）
- 自治体の支援策の情報や、身近な地域で通える居場所等の情報がまとまっているわけではないので、情報を求めているケースも多い。（フリースクール）
- 子供が元気になると保護者も変わる。指導よりも伴走という形が望ましいと思っている。（フリースクール）
- 子供のために仕事を辞めた、何をしたということを言う保護者が多いので、保護者にも自分の時間を大切にするよう勧めている。（フリースクール）

＜保護者が施設選びで気にしていること＞

- 学習支援を求める家庭と、安心できる居場所を求める家庭の2つに分かれる。（相談員）
- 子供の特性への理解と支援を気にされる。（相談員）
- 活動内容、開設曜日や週に何日やっているかも気にしている。（相談員）
- 保護者の希望とお子さんの意思がずれることもあるため、よく相談して決めてもらっている。（相談員）

＜復学のきっかけ＞

- 4月が最も復学者が多い時期。担任の変更により登校できるようになった例もある。（フリースクール）
- 中学進学、高校進学を機に登校を始めた子の例もある。（フリースクール）
- 低学年の方が、不登校の理由が明確で、それが解消すれば戻りやすい。（フリースクール）
- 復学して、頑張りすぎて疲れてしまった時に、フリースクールを居場所として利用する場合もある。（フリースクール）